

いぶき22号平成24年11月号

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第21回：ブルーノ・タウト（1880～1938年）

「日光の大がかりな社寺の如きものなら世界にも沢山ある。・・・それが桂離宮となるとまるで違ってくる。それは世界にも類例なきものである。(1)」



「桂離宮は、施工のみならずその精神から見ても、最も日本的な建築であり、従ってまた伊勢神宮の伝統を相承するものである。この国の最も高貴な国民的な聖所である伊勢神宮の形は、まだシナの影響を蒙らなかった悠遠の時代に由来する。構造、材料および構成は、この上なく簡素明澄である。一切は清純であり、それ故にまた限りなく美しい。(2)」

(出典：(1)『ニッポン』ブルーノ・タウト著、講談社学術文庫、
(2)『日本美の再発見』ブルーノ・タウト著、岩波新書)

1880年(明治13年)ドイツで生まれたタウトは、ケーニヒスベルクの建築学校を卒業後、1910年ライプツィヒ国際建築博覧会での「鉄のモニュメント」、1914年ドイツ工作連盟ケルン展での「ガラスの家」が評価され、ドイツを代表する世界的建築家でした。

1933年(昭和8年)ドイツではナチスが台頭し、新ソ連派との烙印を押されたタウトは職と地位を奪われ、祖国に家族を残したまま日本に亡命しました。昭和8年5月4日、タウトは京都郊外にある『桂離宮』を訪れました。桂離宮は江戸時代初期(1615年頃)に後陽成天皇の弟である八条宮智仁親王により建立された木造建築で、装飾を排した簡素な建築美はモダニズム建築の造形美にも通じるとして高く評価されています。桂離宮を目にしたタウトは「実に涙ぐましいまでに美しい」と簡素で機能的な美しさに驚嘆しています。

タウトはさらに、桂離宮の独創的な美しさの根源として伊勢神宮にたどり着きます。タウトは伊勢神宮に、日本文化の特徴である「簡素」「清明」を見出し、日本独自の文化の根源が日本古来の「神道」と「天皇制」にあることに気付いたのでした。(M.I)